中野重治全集

第十七巻

中野重治全集

第十七巻

筑摩書房

中野重治全集第十七巻
一九七七年一月二十日初版第一刷発行

著者　中野重治
発行者　井上達三
発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号一〇一―九一
電話〇三(233)七六五一(代表)
振替東京六―四一二三
印刷　株式会社精興社
製本　株式会社鈴木製本所
装釘　栃折久美子

© 1977 Shigeharu Nakano　Printed in Japan
0393-73317-4604

第十七巻　目次

斎藤茂吉ノート　一
室生犀星　三〇七

後記
著者うしろ書　室生犀星と斎藤茂吉　五〇九
解題　五一七

斎藤茂吉ノート

前書き　三
斎藤茂吉ノート　五
ノート一　ノートをとる資格　五
ノート二　茂吉にたいする理解　一
ノート三　茂吉にあるわかりにくいもの　二五
ノート四　二つの青春　四九
ノート五　抽象的思惟行為における抒情　六九
ノート六　女人にかかわる歌のうち　八七
ノート七　戦争吟　九五
ノート八　茂吉の「白秋の歌一首」　一〇四
ノート九　短歌写生の説　一二二
ノート十　個の問題　一四一
ノート十一　宗教的ということ　一五四
ノート十二　ヨーロッパと耳と　一六七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ノート十三　疑問的疑問一、二　一八一
鑑賞と批評と　二〇一
『柿本人麿』評釈篇巻之上紹介　二一四
茂吉断片　二二七
はにかみの弁　二三四
訂正その他　二四〇
新版の後書き　二四七
選集版はしがき　二四七
何かの因縁　二四九
現実、象徴、近代などの問題　二五一
『斎藤茂吉全集』第八巻を読む　二五四
茫漠とした思い　二五八
読者という関係　二六一
「短歌における四三調の結句」と「短歌小言」　二六五
茂吉の手帳　二七〇
筑摩叢書版うしろ書き　二七二

『茂吉の体臭』の話　二七四
歌人としての斎藤茂吉　二七七
茂吉とわたし　二八七
晩年の茂吉　二九〇
完全かつ簡便　二九一
「アルス名歌選」のころ　二九二
茂吉略年譜　二九七

室生犀星

まえがき　三〇九
室生犀星　人と作品　三一一
出生と出発　三一一
第一詩集と三十歳　三一六
結婚のよろこびと人間の悲哀　三二二
運命とその交錯　三二九

都会の底　三三四
峠を越す　三三九
豊熟と途上の障碍　三四四
戦争の五年間　三四九
二つの廃墟から　三五五
晩年と最後　三五八
七十歳　三六四
仕事のなかでの七十三年　三六七
日記の犀星　三七一
死、葬送とその後　三七七
詩人としての室生犀星　三八一
教師としての室生犀星　三九一
一九三五年のころ　三九四
金沢の家　三九六
南江二郎氏と諏訪三郎氏　三九八
しやつ、ももひきの類　三九九

犀星 室生さんの死　四〇二
『驢馬』の時分　四〇三
犀星観を問われて　四一〇
茶と菓子　四一三
犀星遺産　四一五
記憶と想像　四一八
母乳のごときもの　四二〇
室生犀星ベスト・スリー　四二一
忘れえぬ書物　四二三
『愛の詩集』初版のこと　四三〇
『室生犀星詩集』について　四三四
犀星 室生さん　四四一
『室生犀星全集』第一巻　四四三
心残りの記　四四七
うろ覚えの記　四四九
『抒情小曲集』解題　四七九

『抒情小曲集』　四八三
室生犀星（照道）　四八四
室生犀星　四八五
うしろがき　四九一
室生犀星年譜　四九二

斎藤茂吉ノート

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

前書き

このノートは、昭和十五年はじめから十六年十一月までに書いて、『日本短歌』『中央公論』『臨床文化』に発表したものにいくらか書きくわえ、それに、昭和十年以後に書いて、『短歌研究』『新潮』『日本読書新聞』に発表した断片その他を付録とし、あわせて一冊としたものである。本文についていえば、『暁紅』『柿本人麿』雑纂篇の発行以前にとりかかり、『白桃』の発行直前に打切りとしたものである。

ノートを思い立つた動機は、自分の文学観の訂正・変改ということであつた。私はそれを、日本文学のうちの最も日本的なもの、いわば最も古い伝統を持つ和歌についてしたいと考え、さしあたり、素人読者として親しんできた茂吉の歌についてたどたどしく試みてみたのであつた。試みが不成功に終つたのは、ひとつには素人のかなしさゆえであつた。

その第一は、必要なものを読まずに不必要なものを知らずに読みあさるということであつた。最後までこれはそういうことになつた。第二に、古雑誌を読んだりして少しずつわかつてくることがあり、わかつてくるのにつれてかえつて書けなくなるという事実であつた。第三は、何か書けた場合にも、それが雑文としての形をとり、あとで誤りを正そうにも手のつけようがないということであつた。

そのうち、「短歌の批評は、さう面倒なものではない。いよいよとなれば最上にむづかしいものであるが、はじめからさうむづかしく考へなくともよい。つまりは自分の力だけの批評しか出来ぬものだから、それにいろいろと工面して、力以上の批評がしたくなるとそこに邪念が入つて、かへつて的の外れたわるい批評になる。私に

はさういふ恥づかしい経験がいくつもあつた。」という結城哀草果の言葉を読み、「知己の言は即ち理会者の言である。理会者の言は常に接触する人々によつて発せられる場合が多いといふのは、接触することによつて真の理会に導かれる場合が多いからである。」という茂吉自身の言葉を読み、それから、アフリカのブッシュマンのあるものには「二」までしか数の観念がなく、それから先はすべて「たくさん」という概念で片づけているという話などを読み、こういう素人くさい目論見にもとどめを刺された思いをしたのであつたが、それでも、「運転中運転手に話しかけぬよう願います」という玉川電車の懸札の文句を思い出したりしてときどき書きついで行つた。

しかしそれも、父の死によつて打ち切られる結果となつた。父は十一月十九日に死に、つづいて「大東亜戦争」の勃発となつた。そしてそうなつてみると、自己の文学観の訂正・変改という最初の目論見の立場そのものが私のなかで改めて批判されるようになつた。私はそれをいくらかでも生かそうとして試みたが、ごくごく不満足にしかできなかつた。まして、もともと今では反対の考えになつている付録のなかのあるものには、今となつてはそれだけに手を入れることができなかつた。ただそれが、いくらかでも本文理解の助けになろうかと思い、ひとまず付録として残すことはそのままとした。また一身上の都合から、この一、二ヵ月のうちに二度ばかりも東京とのあいだを往復する事情にあり、校正のことも全く行きとどかず、釈迢空の歌の解釈の誤り、「萱」と「菅」との誤りなど、一、二気づいたものもそのままにおく結果となつた。ただいまとしては、自己の文学観のささやかな訂正・変改の道行き、それのさらに新しい立場にくるまでのたどたどしい移りゆきの反映としてこのノートが見てもらえれば仕合せである。素人特有の見当ちがいのなかに、やはり素人特有の怪我の功名とでもいえるものが万一にもあるとすればなおさらに仕合せである。

昭和十七年三月

高椋村一本田

斎藤茂吉ノート

ノート一　ノートをとる資格

私の書くのは議論ではない。体系などいうものも全く持つていない。気づいたことを片はしから書いて行き、ある程度それが溜まつた場合これに形を与えてみたいという気はあるが、はたしてどうなるかは今から見当をつけることができない。そういつたこれは性質のものである。

第一私は茂吉を批評・鑑賞するのに十分適した人間ではない。その理由はいろいろにあるが、手近かなものの一つは文献の不備ということである。

『柿本人麿』評釈篇巻之上の序文で茂吉はこう書いている。

「語釈には、能ふかぎり学説文献の記載に努めた。これは一は万葉学発展の経路を追尋することともなり、一は先賢の学徳を敬慕することともなるためである。従来の諸注釈書ややともすれば、この記載を怠つた観があるのを見て、敢てこの実行を試みた。」

また『新撰金槐集私鈔』の序ではこう書いている。

「なほ本書の一つの特色は、いろいろの人の説を抄記した点にある。この事は極めて些事のやうであるが、私自身は割合にこれを重く観てゐる。なぜかといふに、歌壇の人々は、『文献』といふことをば自然科学界の人々ほ

ど重く観てゐないからである。一面は極めて無造做(むぞうさ)で無邪気であり、一面は極めて粗雑で乱暴だからである。このことは、私はすでに『童馬漫語』にも書き、この書物の前身の序文にも書き、なほ懲りずにここにも書くのである。」

ところで、私自身は茂吉に関する文献をほとんど全く持つていない。そのうえ茂吉の作品自身をさえ完全な形では手もとに置いていない。右の序文で茂吉の書いていたのは『万葉集』に関する文献、実朝に関する文献であつて、「極めて無造做で無邪気であり」、「極めて粗雑で乱暴」であつた人びとも、『万葉集』そのもの、実朝の作品そのものはほぼ完全な形で手もとに置いていたに違いなく、私ときては、茂吉そのものをきわめて不十分にしか持つていないのである。

ただしこれには原因がなくはない。「本書には、日本に関する雑文のみを集めた。なほ私は西洋留学中の写生文をも少しく書いてゐる。それ等はまた近いうち集めて見ようと思つてゐる。」ということが「『念珠集』巻末記」に書いてあるが、『現代日本文学全集』(改造社)第五十八巻に一部分はいつているほか、それはまだ本の形にまとめられていない。こういうことがいわば原因の一つである。またたとえば、昭和十五年三月に彼の第三歌集『寒雲』が出たが、それは第二歌集『あらたま』以後二十年間の製作をふくむものではなく、昭和十二、十三、十四年の製作千百十五首だけを含むものである。その「巻末記」には、「この『寒雲』発行以後、昭和十一年昭和十年といふ具合に溯つて、一年一冊ぐらゐづつの新歌集を出すつもりであるから、ねがはくは一瞥せられたい。」と書いてあるが、これは時の問題であつて、「新歌集」の出ていない現在一瞥することのできぬことというまでもなく、いわばこういうことも原因の一つである。(その後、「昭和十年・三六一首、昭和十一年・六〇七首の作、合計九六八首を収めた」「第四歌集」『暁紅』が、昭和十五年六月発行された。)まして『左千夫歌論集』の第四巻(書簡集)がまだ出ていず、デーメルの翻訳詩集が出ていず、『柿本人麿』の第五巻もこれから出ようというありさまである。(その後これは、『柿本人麿』雑纂篇として昭和十五年十二月に出た。)つまり茂吉という

人の作品は――『左千夫書簡集』については彼は編者の一人であるにすぎず、またデーメルの翻訳については、茂吉またはどこかの本屋がその出版をおおやけに約束したかどうか正確に思い出すことができぬが――素人の近づきやすい形でそのすべてが市に出てはいないのである。『日本文学大辞典』は、斎藤茂吉の「著書」の項に『童牛漫語』『西洋紀行集ドナウ源流行』を入れているが、これは単純な誤りというよりも、たとえば『童牛漫語』が「アララギ叢書」第二十八篇としてここ十年来「近刊」広告をしつづけてきているというような事情にも基づくものと見られ、そのこと自身、茂吉の作品を本の形でまとめてみることの困難を語つているといえよう。

あるいは私が歌つくりであつたならば事情は変つていたかもしれない。また『アララギ』の一員であつたならばそれ以上変つていたかもしれない。実際には私はそのどちらでもなかつた。昭和五年前後日本に新興短歌運動あるいはプロレタリア短歌運動というものがおこり、それに関する茂吉の言論が『アララギ』に連載されたことがあつたが、また以前、中村憲吉に関する長い批評が何かの雑誌に連載されたことがあつたが、そういうものも現在私の手もとには集まつていない。「議論などをするときの用意として雑誌なども揃へてゐたのであつたが」（「籠居漫筆」）という言葉もあつてみれば、私のありさまは、ノートをつくるべく不十分不足だというほかなく、つまり実情として、私には茂吉文献が、茂吉の作品と茂吉に関する作品との両方にわたつて相当十分に不足しているのである。ただ私としては、このことが、歌つくりでもなく『アララギ』の一員でもない一人の素人にとつて、ある程度余儀ない事情として一般に見られうると考えるまでである。

第二の理由は私の人間的性質ということである。

彼は書いている。

「実に果敢ない事にのみ骨折るやうであるが、それは僕の性分であらうか。」（「改選『赤光』第三版跋」）

「明治四十三年から大正七年に至る、足かけ九年の間に、をりにふれて書いたはかない漫筆をあつめて、この一巻をつくつた。」（『童馬漫語』「自序」）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com